

編年集成

十五

内閣文庫	
番號	和 10362
冊數	48 (16)
函號	150 2

内閣文庫			
函	冊	架	類
一	八	一	和書
五	二		
九	三		



武德編年集成卷之十五外一至九餘

木村高敦撰

天正三乙亥年
南政官
南庫

五日 應仁文明以後大亂打續キ驛路

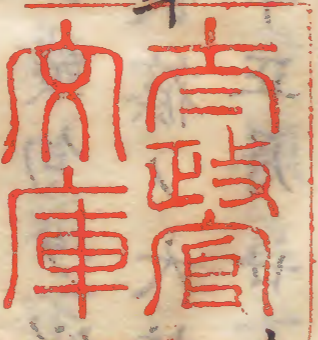
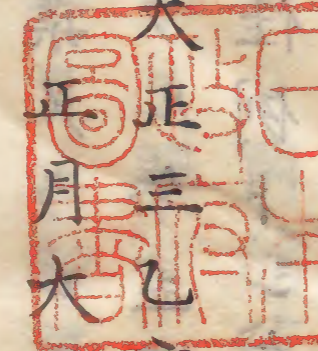
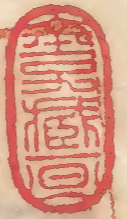
陵廢入當時信長へ雌服セシ東海東山兩

道橋梯ヲ修理シ大道ハ幅三間半徑路ハ

幅三間二十シ往来自由ヲ得セシムヘキ

旨是ヲ觸ラレ坂井文助河野藤藏山口太

郎兵衛篠岡八右衛門此四奉行力萬入用



内一二九七八號

卷之十五

武德編年集成

トノ黄金百両米五百石ヲ授ケラル此由
濱松へモ通達アリト云々

○十八日 天野三郎兵衛康景言主ノ曰
前夜臣カ婢連歌ノ数句ヲ夢ル其詞ニ曰
信玄カ首ヲ今年取フニハ
神君歡テ今日安間村ノ道場等連歌ノ達
者ヲ集メラレ若ノ数句ヲ以テ百韻ヲ興
行セラル今盍夏長篠ノ大捷アリシハ
是ヲ佳例トシ毎年正月廿日御鎧ノ賀ニ
連歌ノ宴ヲ催サル事後代ニ至テ猶然リ

二月小

○八日 岡崎隨念寺領五十石寄附セラ
レ印章ヲ賜フ

○十五日 神君濱松ノ城下ニ放鷹セラ
レ路邊ニ於テ一童ヲ見玉フ其容貌尋常
ナラス英雄ノ相アルヲ以テ姓名ヲ問ハ
ル所井伊彦次郎直満カ孫肥後守直親カ
子万千代今年十五歳也父直親ハ氏真ヨ
リ歿ヲ賜フノ後繼父松下源太郎清景ニ
據テ當城下ニ蟄居ス由ヲ答フ 神君

且驚キ且歡テ即日城上ニ召サレ遠州ヲ
佐郡井谷ハ先祖累代ノ舊領タルニ因テ
其地ヲ賜ハリ井谷三人衆近藤石見康用
鈴木三郎大夫重路管治次郎右衛門定治
且木股清左衛門守勝棕原治右衛門西郷
藤左衛門ヲ輔臣トセラレ其外與力ノ士
附属セウル直政忠烈驍勇英果ニノ夙夜
君ニ咫尺ニ國家ノ為ニ身ヲ忘レ威儀禮
文備ハリ遂ニ御當家干城三傑ノ其一
人トシテ從四位下侍從兼兵部大輔ニ任

叙シ江州佐和山ノ城ニ於テ十八万石ヲ
領スルニ至レリ
○廿八日與平九八郎信昌ニ設樂郡長
篠ノ城ヲ賜リ宮崎ヨリ是ニ移ル去々年
九月以來番手持工ハ破損多シ信昌急ニ
修理ノ聊モ油斷ナキ體ナリ故神君大ニ
感シ玉フ
○三月小
○上旬信長ヨリ江州鎮羽ノ米穀二千俵
ヲ以テ神君ニ贈ラ境目ノ要城ニハ

卷之十五
三
書

置ルヘシト云々其内三百俵長篠ノ城米
ニモ是ヲ賜フ

○十六日 今川氏真頃日攝州邊徘徊ノ

處上京ノ父ノ讐信長ノ旅館相國寺ノ慈

照院ニ至テ謁ヲ執釣花入百端帆ヲ獻ス

是ヨリ嚮モ千鳥ノ香爐ヲ進獻スト云々

○廿日 氏真蹴鞠堪能ノ由其聞ヘアル

故堂上ノ面々ト共ニ信長ノ所望ニ依テ

慈照院ニテ遊庭ノ興ヲ催ス

○下旬信長ノ嫡男勳九郎信忠從五位下

ニ叙シ出羽守ニ任ス是則秋田城介ナリ

○今春上杉謙信越後春日山ノ居城摠堀

ヲ浚ヒ壘壁ヲ修補ス是ハ信長ト一戰シ

決シ上京ノ望アル故其虛ヲ量リ勝頼若

クハ越後ハ亂入セシ遠慮歎ト謳歌ス

四月大

○朔日 近年堂上ノ面々領知ヲ沽却ノ

懸命ノ助ナシ信長今日教令有テ其買主

ニ金銀ヲ授ケ悉ク其地ヲ本主ニ還附セ

ラル 叡感不斜ト云々

○五日武田勝頼遠州平山越ヲ歷テ濱
名城ヲ巡視シ參州八名郡宇利ニ到テ屯
ス爰ニ岡崎ノ微臣ニ大賀弥四郎ト云者
アリ奴隸ニ出ト云ヘ臣頗ル勤功ノ勞ヲ
盡メ神君參州奥郡廿四郷ノ賦稅ヲ掌
ラシメラル家富族盛ニノ驕奢ノ餘リ頃
年神君ヲ亡サシ逆意ヲ生シ神君ト
三郎君ノ御中ヲ斷ント讒諫ヲ搆ヘ且山
田八藏重英倉地平左衛門小谷甚左衛門
ト密議シ武田ニ内應ノ曰ク徳川殿每度

濱松岡崎両城ニ還入シ玉ヲ時ハ弥四郎
先達テ門戸ニ臨ミ扉ヲ開カシム早ク勝
頼參州設樂郡作手迄出馬セラレ夜中ニ
先軍二三隊密々岡崎ヘ進メ玉ハ々我僂
テ徳川殿到ラセ玉ヲ由ラ彌シ門戸ヲ
開カシメ武田勢ヲ城内ニ入テ忽ニ三郎
信康君ヲ弑セシ事輒カルヘシ且彼城ニ
ハ參遠ノ人質悉ク在ル上ハ勝頼等ニ血
塗ラスノ國人ヲ服セラルヘシ適ク濱松
ニ在勤スル麾下ノ親兵二三百アリト云

庄岡崎ニ在ル妻子ヲ武田方へ捕へラレ
ハ果敢々々シク戦功ヲ遂へカラス六久
保一黨計コソ努々降参スヘカラス然レ
氏一族小祿ニノ功ヲ立難ク上和田ノ妻
子ハ矢矧川ヲ越テ尾州ニ落行ン所ヲ川
向ニ小谷甚左衛門山田八藏扣テ待受生
捕ニスヘシ兎角ノ徳川殿勢究リテ濱
松ニ恠ヘ難ク船ニテ勢州へ退キ玉ハシ
然ラスシハ吉良ニ移リ尾州へ渡海有ヘ
キカ参遠ノ二州ヲ不日ニ勝頼ノ掌ニ入

シト云々勝頼愚昧ニノ欣然不斜抽賞ヲ
約シテ旗ヲ設樂郡筑手ニ進ムル所ニ山
田八藏重英翻然トメ悔悟シ以為君ヲ弑
スルハ大逆天地ノ容サル所而モ其事遂
難カルヘシト密々岡崎城ニ入信康君ニ
告テ若又信シ玉ハスハ人ヲ吾卧内ニ入
テ其謀畧ヲ聞セラルヘシト云信康君即
渠力詞ニ随テ其實ヲ紕シ濱松ニ遣セラ
ル小谷甚左衛門ハ事發覺スルヲ知テ遠
州國領ノ郷ニ遁ル渡辺半藏守綱是ヲ捕

ントシケルカ変テ矢龍川ニ飛入游テニ
股ノ城ニ入夫ヨリ甲陽へ逃去ル倉地平
左衛門ヲハ今村彦兵衛勝長
岡傳藏清勝孫右衛門助馳向テ是ヲ討捕
首級ヲ獻ス于時勝長ニ賞祿ヲ叛逆ノ張
本人大賀弥四郎ヲハ岡崎ノ町司大岡孫
右衛門助宗是ヲ生捕ケシハ大久保忠世
奉リテ馬ノ三頭ノ方へ弥四郎カ面ヲ向
テ鞍ニ縛リ附叛逆ノ為ニ渠カ拵へ置シ
旗ヲ指セ首金ヲハメテ螺鐘笛太鼓ニテ

離シ立其路次念志原ニ彼妻子八人ヲ際
ニ島テ見セケレハ弥四郎殊ノ外悲メル
色外ニ顯ハレケルカ何トヤ思ヒケン面
ヲ少シ揚テ汝等ハ先へ行ケルカ目出度
事我吾モ跡ヨリ往へシト云へリ聞者皆
大ニ憎テ惡口ス斯テ濱松へ引亘シ城下
ヲ巡ラセ又岡崎へ道ヲ替テ引戻シ町口
ノ四辻ニ生十カラ出中ニ埋メ首ニ板ヲ
ハメ十ノ指ヲ切テ目前ニ雙へ足ノ大筋
ヲ斷テ竹鋸ヲ置テ往来ノ者ニ是ヲ挽シ

ムル所兼テ 神君ノ仁徳國中ニ溢レ士
民渠ヲ憎ムノ至リ老弱羣衆メ是ヲ挽テ
七日ニメ遂ニ死ス 神君モ亦下賤ノ者
ヲ頻ニ登用スヘカラスト悔甘セ玉フ斯
テ勝頼計策齟齬シケレハ二連木ヘ働ラ
ク 神君ハ吉田城ニ御動座三郎信康君
ハ山中ノ法藏寺ニ屯セラシ姜原ニ於テ
迫合アリ勝頼遂ニ兵ヲ旋ス
○八日 往年河州高屋ノ城主畠山昭高
ハル後三好山城守康長入道笑岩浪客夕

リシヲ地下入取立テ當城ヘ引入主將ト
シケルカ信長ニ攻ラレ今日笑岩降參ノ
河州一圓ニ平夷ス
○十二日 武田信玄遺骸ヲ甲陽惠林寺
ニ葬ル是去々年以来彼横死ヲ隱密シケ
ルカ頃日世ニ流布スルユヘ俄ニ葬送ノ
事ニ及ヘリ
○十九日 信長泉南堺邊新堀ノ砦ヲ攻
落シ城將二人ノ内十河因幡守討死香西
越後守虜ト成テ則誅セラル

○廿一日 勝頼二千餘兵ヲ分テ參州設
樂郡長篠ノ城ヘ向ハシム

○廿五日 大樹寺十四世現任成譽寂ス
神君ノ御
伯父ナリ

五月小

○朔日 勝頼參州八名郡山野吉田ヲ歷
テ内金村ニ至リ此所ニテ甲冑ヲ著シ
神君ヨリ與平九八郎信昌並五井ノ松平
弥九郎景忠形原ノ松平又七郎家忠福釜
ノ松平三郎次郎親俊等驍士二百人火炮

二百挺ヲ以テ守ラセラルケ長篠城ヲ急
ニ攻拔ント欲シ先達テ小山田高坂諸賀
小泉相木等二千餘ヲ八岩代川ノ邊篠原
ニ賦シ惣軍ハ横山村内金村迄段々ニ屯
ヲ張テ且所々ニ向城ヲ設ク奮力巢山ニ
ハ武田兵庫信實二百五十餘山中山ニ浪
人組七十餘火炮ノ卒ヲ加フ君力伏床ニ
和田兵部信業五百人姥カ懐ニ三枝勘解
由左衛門守友三百五十五人久間山ニ和
氣善兵衛大戸民部直光倉賀野淡路秀景

波合備前二百十三人嶮ニ據テ柵ヲ附是
 ヲ籠置ト云々勝頼旗本ハ醫王寺山ニ在
 營ニ典厩信豊ハ大通寺山穴山陸奥入道
 梅雪ハ西川岸ニ備ヘ粮道ヲ斷テ昼夜ヲ
 分ス長篠城ヲ攻侵ス所城將與平信昌弱
 年ト雖驍勇激烈且援將ハ神君御門葉
 ノ歷々各逞卒ヲ携ヘ籠リケレハ命ヲ塵
 芥ニ比メ防戰懈ル事ナシト云々
 ○野田ノ菅沼新八郎力族同助十郎勝重
 ハ奥平藤兵衛貞友力婿ニテ信昌力縁者

ユヘ定盈ニ請テ長篠ノ城ニ入ラントス

定盈家臣黒屋某ヲ添テ勝重ヲ城ニ入ル

信昌悦テ刀一腰ヲ勝重ニ授ク勝重後治大夫ト改

法名在間ト号ス

○六日勝頼旗本彼是一万許ニテ渥美

郡二連木宝飯郡牛久保ニ蒞シ橋尾ノ堰

ヲ斷シム是ハ東參河ノ田ニ掛ル用水也

依之東參悉ク早損スヘシ敵城ヲ責ルノ

刻如斯事曾テスヘカヲサレ勸ノ由甲州

勢歎息ス勝頼渥美郡吉田ノ城ニ向フ

神君是ニ對シ其兵五千吉田口ニ屯シ玉
ヒ信康君ハ元ノ陳處法藏寺ニ在ラス勝
頼小山ニ登テ戰ントス酒井忠次 神君
ヲ諫テ曰味方兵寡シ吉田ノ市中ニ入玉
フヘシト 神君是ニ隨ヒ左衛門尉ヲ後
殿トシ引取玉ハ山縣三郎兵衛火炮五
隊ヲ帥テ跡ヲ躡テ來ル酒井止テ相戦ヒ
周旋ノ引取敵町口ニ臨ヒ薄暮迄迫合有
テ雌雄決セス左衛門尉又馬ヲ躍ラセ大
津出左衛門時隆ト共ニ屢々戦ヒ兵ヲ全

クノ悉ク病城ニ入シム
○七日 山縣カ與力廣瀨郷左衛門景房
吉田ノ病城ニ臨テ酒井左衛門尉忠次ト
相戦フ事三度ニ及フ其内互ニ詞ヲ通シ
證據トスル事兩度ナリ小菅五郎兵衛元
成孕石主水曲淵庄左衛門吉景辻弥兵衛
盛昌和田嘉助長坂十左衛門等救ヒ來リ
各姓名ヲ唱フ水野摠兵衛忠重戸田左門
一西渡边半藏守綱等ノ驍士三十餘人邀
ハ闖フ酒井左衛門尉ト山縣三郎兵衛詞

ヲ通シ互ニ騎違へ鉾ヲ接へ甲州方突立
 ラレ遂ニ敗ス此時廣瀨周旋ノ軍ヲ纏ヒ
 退ク觀ル者廣瀨カ勇功ト騎乗ノ達者ト
 ルヲ感ス勝頼再ヒ醫王寺山ノ陳所ニ到
 リ頻ニ長篠ノ城郭ヲ攻ル神君曾テ小
 栗大六重常ヲ兩度岐阜ニ遣ハシ信長ノ
 出馬ヲ乞玉ヘ任信玄率去ノ沙汰ニ依テ
 勝頼ノ至愚必以來人望ニ背カシ其時ヲ
 得テ討ント欲シ信長許容ナシ然レ任
 神君ハ設樂郡迄御出馬眼前ニ九八郎ヲ

攻亡サセテ公弓矢ノ本意ニ非ス微勢十
 リ任是非救ハスハ有ヘカラス九死一
 生ト究メ玉ヒ近臣淺岡某ヲ大河内隼人
 カ許へ遣ハシ射鞬ノ緒ノ雷様ヲ傳へ來
 ルヘキ旨命セラル且長臣等カ諫ニ因
 テ再三小栗大六ヲ岐阜ニ遣ハシ信長ノ
 出馬ヲ請玉フト雖承諾ナシ于時大六ハ
 矢部善七郎ニ神君ノ密旨ヲ傳ヘケル
 ハ吾先年信長ト交和シ互ニ救援ヲ盟シ
 以來江州佐々木退治ヲ初メ數度ニ及ヒ

信長ニ大功ヲ遂サセ殊ニ妙川ノ勲業天
 下是ヲ通知ス然ルヲ今更違約ノ援ヒ玉
 フ事十クンハ吾勝頼ト和融シ兩旗ヲ以
 テ尾州ヲ攻取テ遠州ヲ避テ勝頼ニ渡シ
 吾ハ尾州ヲ領スヘキ由ヲ述ル此事善七
 郎潛ニ信長ヘ告ル故大ニ驚キ長篠ノ後
 援トノ出陳スヘシト令ヲ下シ諸州ノ兵
 ヲ催シ人毎ニ柵木一本繩一束ヲ携フヘ
 キ由ヲ觸ラル
 ○或曰信長出馬遲滞ニ仍テ人神君ノ

勢疑惑ノ機アリ酒井左衛門尉冑ヲ脱
 テ高紐ニ掛テ長々ト猪首ノ狂言ヲ十
 シケレハ衆皆嗤ト笑ヒ兵氣新々ニ熾
 シニナル 神君重テ石川數正ヲ以テ
 信長ノ出馬ヲ乞ヒ玉フ
 ○十一日 長篠ノ寄手ニ丸渡合口門際
 ニ仕寄セ乗入ラントス信昌是ヲ防キ且
 突出テ大ニ敵ヲ敗ル
 ○十二日 長篠ノ寄手又利ヲ失フ此時
 城兵今泉内記矢挾間ヨリ顔ヲ出シ寄手

ヲ窺ヒ火炮ニ中ル後藤助左衛門七同少
 鳥銃ニ中テ倒レ伏ケルカ藥ヲ服用セシ
 メ心機ニ十ル是日 廣忠君以來ノ臣設
 樂郡川路村ノ設樂雅樂助貞重卒ス
 ○十三日 信長父子岐阜ヲ首途シテ尾
 州熱田ニ著シ老臣ニ向テ勝頼長篠ノ向
 ノ原迄軍ヲ進メハ吾利疑ナシト宣フ
其詞ノ如シ後 今夕敵長篠ノ本丸東ノ方
ニ衆皆感ス 懸ル迄ニノ東西十八間南北廿二間アリ

シカ銃兵餘多籠レリ空曇リ月朦々タル
 故是ヲ幸ト鳴ヲ静メ敵ヲ引付火炮ヲ發
 ノ寄手若干死傷シケルカ尚々敵事任セ
 ス堀ニ鹿角ヲ掛テ引倒サントス城兵柱
 ニ扣ヘ繩ヲ附堅固ニ搆ル上横矢ヲ繁ク
 射ル殊ニ此曲輪ニ行道挾キ事瓢ノ如シ
 因テ寄手八百人手負死ヲ致シ遂ニ功ナ
 ク引退ク信昌白晝ニハ兵ヲ引取事叶フ
 一シトテ夜中此郭ヲ棄テ本丸へ兵ヲ入
 ル其夜半敵又大手ノ門際ニ井樓ヲ舉テ

城内ヲ窺ハントシ又本丸ノ西ノ隅へ仕
寄土居へ金鑿ヲ入色々攻具ヲ用意シ乘
入ントス松平景忠等嚴久防戦ノ敵ヲ又
追崩ス信長衆佐久間信盛毛利河内守秀
頼參州寶飯郡長澤迄來著シ擬議シテ進
マスト去々

○或曰是信長ノ計畧ニシテ此兩將ニ心
アル體ヲ顯ハサシメレ為ニ先達テ長
沢迄遣ハシ置信盛カ方ヨリ勝頼ヲ調
畧アラシムルヲシト云々

十四日 長篠ノ寄手又惣攻ス信昌奮
ヒ撃テ武田勢引退ク城兵五數十人疵ヲ
蒙ル松平又七郎カ從士戸田藤五郎常々
八幡宮ヲ信敬シ今曉城門ヲ出川端ニ到
テ垢離ヲテス于時寄手ノ能キ武士川邊
ヲ巡視シケルカ踏外ノ川へ陷ル是神ノ
瑞應ナルヘシト大ニ歡テ組伏首ヲ獲ル
川城中ニ於テ與平ノ一族老臣且援將ノ
松平黨評議シ曰敵ノ大軍幾重尾十ノ取
圍ニ城中僅四五日ノ糧米アリ速ニ伐出

卷之十五
一五
蓋口圖藏

戰死以名ヲ遺サント云々于時鳥居強右
 衛門勝商進出テ曰今夜勝商城中ヲ恐ヒ
 出テ向ノ寒防カ峠或ハ船着ニ於テ煙ヲ
 揚テ後詰ヲ請ヒ奉リ事協フハ夕ハ三日
 過テ又彼山ニ於テ三度煙ヲ揚ヘシ後援
 十キニ於テ八兩度煙ヲ揚ヘシト云信昌
 ハ城モ全ク矢玉モ多ケレバ只糧米盡タ
 リ其自殺ノ諸卒ヲ助ケシト欲ス早ク後
 援ナシ玉フヘシト言上又入キ旨委細ニ
 申合四鳥居承諾ス信昌曰汝ハ日本

人勇者ト云ヘシ若討ルルニ恩賞公子孫
 三及フヘシ勝商曰愚息龜千代纔ニ六歳
 然レ母ヲ附置ハ覺束十キ事ナシ只恙
 ナク恐ヒ出運ヲ開カセシト欲スルトテ
 今夜忍ヒ出ル于時三十六歳ト云々
 ○十五日鳥居強右衛門岡崎ニ到テ信
 昌カ口授ノ趣ヲ言上ス神君則今酉ノ
 刻信長牛窪ヘ著馬セラレハシ此旨直ニ
 演説スヘシト鳥居ヲ牛窪ニ遣ハシ玉
 フ所ニ果テ信長父子牧野康成カ牛窪ノ

城ニ著陳有テ即強右衛門拜謁ス信長牛
 窪城ヲハ福田參河守元忠兵庫頭長照ヲ
 入置近境諸將ノ質子ヲ此城ニ收メラル
 昌註酒井忠次ヨリハ其季子彦八郎七歳
 〇タリシヲ牛窪ニ送ル是本多忠俊力養
 子ト成後縫殿助康俊ト稱スト云々
 ①十六日出神君寶川迄信長ヲ迎ヘ玉ヒ
 御對顔有テ出馬ノ事ヲ謝シ玉フ然ルニ
 去年高天神ノ後詰トメ信長遙々旗ヲ進
 メテシカ其間ニ城主小笠原與八郎怯

クメ武田ニ降リシ故今度信長又出馬ノ
 上ハ神君先鋒トメ有無ノ勝敗ヲ決セ
 ラルヘキ機ヲ信長是ヲ悟リ玉ヒ予力出
 馬ハ幾度ニテモ苦シカラス貴客名將故
 卒爾ノ軍ヲ好ミ玉ハスメ予力著陳スル
 ヲ待受ラレシ段祝著ス但勝敗ハ時運ニ
 アリ數回利非スモ遂ニ勝事ヲ得ルヲ專
 一トス昌徳川殿ハ勿論也士卒迄モ死ヲ
 輕ニスヘカラスト宣フ信長後詰ノ趣信
 昌ニ知ラセント鳥居強右衛門初メノ嶺

三テ三度烟ヲ揚レハ長篠城中大ニ悦フ
 而ノ長篠ノ向篠原ニ至リ城へ歸リ入ニ
 ト敵ノ透間ヲ伺ヘ氏鳥十ヲテハ通フヘ
 キ様十少遂ニ穴山勢ニ虜トセラル勝頼
 渠ヲ罪セスノ吾ニ屬シ忠ヲ勵テスヘキ
 旨ヲ告ル勝商偽リ諾ス
 ①十七日 信長設樂郡野田ノ原ヲ歷テ
 海倉原ニテ菅沼新八郎定盈ニ對面シ往
 年野田籠城ノ功ヲ感セラル根小屋ニ著
 陳アリ追々軍勢著到ノ五方餘ニ及フ鳥

居強右衛門ハ勝頼ヲ謀テ曰城門ニ至リ
 朋友ヲ呼出シ信長此表ノ後援思ヒ寄ラ
 ス早ク城ヲ避渡スヘキ旨ヲ告ヘシト云
 ケレハ勝頼悦テ軍士十人ヲ副テ柵際ニ
 遣ハス所朋友ヲ呼出シ信長 徳川殿後
 詰アルヘキ旨ヲ大ニ呼ハリシカハ敵甚
 憎ニテ有見原ニ於テ礮ニ入信長設樂村
 川上村ノ地勢ヲ監臨シ設樂ノ極樂寺山
 ヲ本陳ト定メ長男信忠ハ矢部村天神山
 次男信雄ハ御堂山ヲ陳所トシ十三段ニ

兵ヲ賦シテ柵ヲ二重ニ附堅固ノ手置ヲ
 十シ玉ヲ文ハ見ルハハ天ノ陰ニハハ天ノ陰ニハハ天ノ陰ニ
 ○廿日酒井左衛門尉忠次方請フ所ヲ
 信長是ヲ許シ夜中參遠ノ兵三千並ニ信
 長ヨリ軍監ヲ添テ遙々南へ廻リ長篠ノ
 附城保祖父山鷲力巢山君力伏床久間
 山等ヲ攻ル事曉天ニ至リ悉ク是ヲ陥入
 ○廿一日勝頼一万五千餘瀧川ノ石橋
 ヲ渡リ一騎打ノ細道ヲ三十餘町押出シ
 信長並ニ門神君ノ御陳ニ向フル雖味方

ノ諸陳乾堀出居柵ヲ搆ル事二重ニノ五
 十間三十間置テ虎口ヲ儲ケ信長摠隊ノ
 火炮三千挺神君總隊ノ鳥銃三百挺ヲ
 柵ノ内外ニ賦メ奇兵ヲ柵外ニ出シ會釋
 シ殊更大久保兄弟柵外ニ進テ敵ヲ偽引
 敵來レハ柵中ニ引入火炮ヲ發シ敵退ケ
 ハ又進テ是ヲ惱メシ遂ニ甲陽ノ士大將
 等悉ク擊込サレ勝頼這々遁レ去リ初鹿
 野一人扈從ス小山田掃部同弥助寺島甫
 菴高名ノ勝頼ニ追著纔六騎參州黑瀬ノ

小松力瀬ヲ涉リ逃去ル又長篠ノ城兵ト
 鳶カ巢山ノ攻手ト前後ヨリ竟ヒ攻テ附
 城數箇所陷ル酒井忠次カ策ニテ設樂甚
 三郎貞通領知川路ヨリ直ニ樋田伊原陳
 場三所ニ川ヲ前ニ屯ニ附城ノ敗兵若
 干討捕ケル長篠戰場ハ勿論所々ノ附城
 等ノ武田勢ヲ今日 神君及ヒ信長方へ
 斬獲ノ首數一万三千餘級ト云々

①註 味方松平兵庫頭親乗カ庶子半十郎
 七平鳶カ巢山ニ戦死ス本多甚九郎正

近出屋治左衛門正家以下戦死ス味方
 ノ軍功四戦紀聞ニ甚詳ナリ

○水野左近大夫清久カ傳書ニ曰信長
 今朝 神君ニ謂テ曰武田ハ 徳川家
 年来ノ敵ナレハ今度遺恨ヲ晴サント
 テ深入シ玉フ事勿レ 徳川家戦死セ
 ラレテハ一戦勝利ヲ得テモ其詮ナシ
 兔角今日ハ菩薩我ヲ持テ軍ニ構ヒ玉
 フヘカラス武田勢ヲ緞雲雀ノ如クメ
 見スヘキ也ト宣フ果ノ柵外へ奇兵ヲ

出シ敵強ク騎騁ル時ハ柵中ニ引入敵
 ハ勝ニ乗テ一層ニ五十騎三十騎一參
 ニ乗破ラントノ柵ニ行蒐リ死闘スル
 所ヲ火炮ヲ以テ一同ニ五騎十騎宛打
 落セハ後ニハ敵倦ミ疲レ練雲雀ノ如
 ニ成リ又然ル所ヲ信長旗本ヨリ関ヲ
 襲シ若干ノ正兵攻蒐レハ敵大ニ敗北
 シ川へ追入ラレ鑿ニセラル殘ル者僅
 ニ雜兵二千許ト云々

○織田城介信忠三郎信康君ト氏ニ長篠

ノ城中ニ入城將九八郎信昌ニ向テ此度
 方六町ニ足ラサル小壘ニ籠リ漸ク出居
 計ノ搔揚ヲ以テ三万餘ノ大敵ヲ拒ク事
 希代ノ功名タル由ヲ稱美セラレ援將ノ
 松平黨且信昌カ同姓ノ族七人藤兵衛貞
 友修理定良四十歳土佐廿二歳但馬四十歳利庵廿六歳
 治左衛門廿二歳周防主馬力與兵衛廿四歳長
 臣五人山崎善兵衛廿五歳生田四郎兵衛廿六歳
 空法諱 兵藤新左衛門黒屋甚右衛門夏目
 五郎左衛門且援將ノ從士等力拒守ノ勞

卷之十五
三十一
畫中隱居

ヲ感稱セラル
○信長長篠城ヲ巡視シ大久保七郎右衛門同治右衛門ヲ呼テ兩輩力武者扱ヒ蒐引ヲ以テ吾能稽古ヲ成ス與家康ト昆弟ノ睦ヲ成テ海内ヲ治ントス誰ヲ恐ルヘキヤ近年ノ内四夷八荒悉ク平均スヘシ今度ノ大勝利織田徳川ノ將卒等驍勇ノ致ス處ト雖畢竟汝等力武邊場數ノ功ニ出ル斯ル剛士多キヲ以テ徳川殿微勢ニテ大軍英將ノ信玄ト數箇年兵ヲ締

ハ信長力關西ノ功業成テ今般大捷ヲ得ル由褒賞不斜聞者咸ク歎服スト云々
○或曰勝頼秘藏ノ駿馬放レテ味方ノ陳ニ來ル故是ヲ取テ信長ニ獻スル處自愛不斜今度戰場へ馭玉ヲ柴田驄ト云良馬ヲハ飯路ニ熟田ノ社へ牽セ奉納アルヘシト云々
○廿二日信長長篠表ヲ發シ飯國ニ赴カル古呂水坂ニテ具平九八郎拜謁ス其弱年ニシテ篁城ノ真忠勇謀比倫ナキ事

卷之十五
三十一
畫中隱居

ヲ感シ孟ヲ賜ハリ一族七人老臣五人モ
亦孟ヲ授ケラレ向於九八郎異名ヲ武者
之助ト称スヘキ由ナリ而メ川路村ノ松
樂寺ニ至テ休息アリ出陳ノ時モ爰ニ駕
ヲ止メシ佳例ヲ以テ自今松ヲ勝ニ改メ
勝樂寺ト書スヘシト云々

○或曰九八郎此時迄貞昌ト云是曾祖
父ノ信長諱ノ一字ヲ與ヘラレ信昌ト改
ム今度久世三四郎廣宣坂部三十郎廣
勝杉浦八郎五郎鎮貞一列ニ戰功有

神君三人ニ平安城長吉ノ鎗一筋宛ヲ
賜ハル島田治兵衛重次加藤喜左衛門
正次柵際ニテ首級ヲ得神谷與左衛門
モ功名ヲ遂ル各采邑五十貫宛ヲ賜フ
○長篠大捷ニ依テ作手田嶺岩小屋鳳來
寺等ノ勝頼方ノ數岩悉ク避渡シテ甲州
へ走ル神君與平信昌ヲ以テ城々ヲ請
取シメ兵士ヲ遣ハシ是ヲ守ラシメ玉フ
然メ作手田嶺長篠領吉良田原ノ内遠州
刑部吉備新城山梨高邊等ノ數邑三千貫

卷之十一
三十三
畫中隱居

ヲ信昌ニ賜フ且先年姊川大捷ノ時信長ヨリ贈ラレシ大般若長光ノ利刀ヲ信昌ニ授ケラル信長西尾小左衛門吉次ヲ以テ神君ノ姫君今度信昌ニ嫁シ玉フヘキ旨ヲ命セラル神君御許諾アリシカ三郎君ハ信昌ヲ賤ミテ肯玉ハス神君則是ヲ信長ニ違セラル處信康ノ宣フ所モ勿論宜ナリト雖忠勲ト云ヒ且ハ敵境ノ要地ヲ守ラシムル信昌十レハ堪忍アリテ妹君ヲ送リ玉ヘト諫メラレケレハ

信康主モ遂ニ御得心アリ此時信昌力妹ヲ以テ本多豊後守廣孝力次男藤六郎重純ニ嫁スヘキ旨ヲ鈞命アリ
○廿五日 信長神君ヘ對顔シ長篠大勝利武田方凡牙耳目ノ臣鑿ニス前田利家木下秀吉ハ此弊ニ乘テ甲信ニ亂入シ武田ヲ亡スヘキ由ヲ諫ルト雖勝頼昏愚ニノ跡部長坂ヲ愛ス彼二人幸ニ死ヲ遁ル間弥主ヲ誑カシ頭負偏頗ヲ專トシ士民義ヲ失ヒ追從輕薄ノミニテ終ニ勝頼

社稷ヲ亡スニ至ルヘシ其上吾軍殊ノ外
 疲勞ス暫ク人馬ヲ休メ近日軍ヲ濃州岩
 村ニ發シテ秋山伯耆ヲ誅伐シ勝頼暴惡
 募リ士民叛ク時ヲ得テ是ヲ謀ルヘシ其
 刻木徳川殿ハ遠參兩國ヨリ甲信ノ間へ
 進發セララルヘシト謂テ岐阜へ凱旋アリ
 是ハ信長ノ嚴父備後守信秀ノ遺言ニ大
 利ヲ得テ後其國ヲ富シ兵ヲ養フ事ヲ能
 スレハ敵國自然ト亡ル由宣ヒシヲ守リ
 至フト云ヘ凡直ニ追番ヒ敵地へ亂入ア

ラハ武田カ殘黨高坂カ微勢何ヲ織田
 徳川ノ銳卒ニ楯衝コトヲ得ンヤ此一件
 全ク信長慎ミヲ深クスルノ大失タル旨
 當時ノ勇士是ヲ評ス
 ○按スルニ神君信長ヲ送ラセ玉ヒ
 參州ノ地ニ於テ御對顔有ケルカ又今
 日信長岐阜ニ遷著ト云説アリ疑ラク
 ○ハ非ナラン
 ○或曰經營下東鈴木太郎次吉次ニ
 命アリテ其在邑ヲ家號トシテ木原ト

改ムルニ其致...

○二日神君遠州城東郡鳥羽山ニ御著
 陳有テ勝頼方信州蘆田ノ依田下總守幸
 成力楯籠ルニ股城へ兵ヲ進メラル于時
 幸成力子右衛門大夫幸致後改城ヨリ鳥
 羽山ノ下へ出張シ小川ヲ隔テ火砲ヲ發
 ス味方ノ精射内藤彌次右衛門家長頻ニ
 箭ヲ發シ敵恠へス引退ク松平彦九郎右
 衛門忠敵ニ朱挑燈ノ棕物アルヲ見テ味
 長力弟

方ニモ此捺物ノ勇士アルヲ以テ誤テ敵
 軍ニ入ル朝比奈弥兵衛是ヲ射殺ス弥次
 右衛門家長ハ彦九郎力縁者也引返ノ弥
 兵衛ヲ射ケルカ其矢鞍ノ前後ヲ貫ク弥
 兵衛力弟弥藏馳到テ兄カ斃ヲ退ントス
 ル所ヲ二ノ矢ヲ以テ是ヲ射殺ス城兵遂
 ニ二人ノ死斃ヲ退ル味方本多忠勝等急
 ニ撃テ敵方ヨリ火ヲ城外ニ放テ煙ノ紛
 レニ郭内ニ引入ケルカ一人疵ヲ蒙フリ
 猶豫スル者アリ城兵一人反リ進ンテ是

卷之十一
二六
畫中
國

ヲ助ケ郭内ニ赴ク所ヲ櫻井庄之助勝次
初メ敵ノ首一級ヲ得タリシカ又進シテ
是ヲ追行ク神君御覽アリテ蓋四半ノ
捺物ハ櫻井十ルヘシ深入以ノ外危キト
テ賢慮ヲ悩マサル其時敵ノ手負ヲ助
ケタル者ハ漸ク一ノ木戸揚鎖門ノ中へ
入シカ手負ハイマ夕外へ見ユル所ヲ勝
次馳著テ疵ヲ被フル者ノ足ヲ取テ三間
許引出シ首ヲ取ル其節門内ヨリ勝次カ
捺物ヲ打折ケルカ敵ノ屍ニ懸リ止リシ

ヲ勝次ハ知ラス五六間引取トキ其奴僕
是ヲ知ラセシカハ忽馳歸リ捺物ヲ取テ
鳥羽山ニ到リ首級ヲ獻ス神君汝カ只
今ノ勳比類ナシ誠ニ今ニ始メサル勇功
ナリ重テハ努々如斯深入スヘカラスト
テ遠州ノ神間村上敷地村下敷地村高木
村ノ内ニテ加恩ヲ賜フ右ノ僕從七度々
功アル故侍トナシ内田彦右衛門ト称ス
味方松平源太郎清景等劊ヲ蒙リ討死ス
ル者モ少ク有ト云々

卷之十一
二六
畫中
國

○三日 依田幸成昨日内藤弥次右衛門
 カ發スル所ノ大箭ニ札ヲ附是何人ノ矢
 十ルヤ為朝カ教經カト書テ石川家成カ
 許ニ送ル 神君モ家長カ精射ノ功ヲ感
 シ胴服ヲ賜フ然ノ昆沙門堂鳥羽山和田
 ノ島蟻原ニ大久保七郎右衛門忠世ニ
 命シ砦ヲ築シメ兵ヲ籠テ二股ノ敵城ニ
 迫ラシメ玉フ其上長陳ヲ敵ニ知ラシメ
 シ為ニ蟻原ニテ猿樂ヲ催ノ諸卒ニ見セ
 シメ是ヲ饗シ味方ノ兵勢ヲ新夕ニナシ

敵城ノ機ヲ奪ハル

○頃日 神君懸川ニ屯セラレ諸軍ヲ以
 テ武田方ノ海野遠山等カ守ル遠州諏訪
 原城ヲ襲ハシメ櫻井ノ松平與一郎忠正
 附城ヲ守リケルカ 仰ニ因テ彼山下龜
 甲曲輪ト云出丸ヲ乗取或日大給ノ松平
 左近大夫真乘菊川ノ方ヨリ攻寄ル所城
 ヲリ突出戦ヒ真乘從軍敗北ス星野某穴
 アルヲ知ラスノ陷リケルカ敵モ是ヲ見
 スノ山上ニ追登ル于時星野穴ヨリ出テ

一鎗セシト詔リ進メハ真乘カ敗兵其聲
 ヲ聞テ守返シ再ヒ敵ヲ城門ノ際迄追撃
 シ附入ニセシト入然レ兵城兵堅ク拒ク
 故兵ヲ收ム 神君殊ニ星野ヲ褒玉ヘハ
 星野ハ全ク壮勇ノ沙汰ニ非ス誤テ宍ニ
 陥リケル故ノ小返ナリト言上シケレバ
 諸人尚以テ其功ニ誇ラサル事ヲ感ス
 ○信長上京慈照院ニ止宿シ玉フ城介信
 忠正五位下ニ叙セラルル應仁以来天下擾
 亂王制陵廢シ諸國ノ風俗叙位任官

勅許ナクシテ私ニ官名ヲ僭稱セシムル
 工へ羽柴秀吉ハ筑前守川尻與兵衛鎮吉
 ハ肥前守明智十兵衛光秀ハ惟任日向守
 家号_トト稱シ_二嫡九郎左衛門直政_一壬原田
 備中守ト稱ス築田左衛門太郎政次ハ戸
 次右近ト改ム 天正十午秀吉實ニ從
 四位下少將ニ叙任ス
 ○十一日 神君田中へ御出馬ハ幡山ヲ
 御本陳トシ田中城ノ揚土門迄松平康親
 牧野大須賀押詰ル康親力臣岡田竹右衛
 門一番乗ヲナス時火砲ニ中リ堀へ落ル

ヲ家僕杉浦仁右衛門肩ニ懸テ退ク敵追
蒐レハ康親後士平岩源右衛門岡田多左
衛門敵ト戦ヒ是ヲ救フ

吾兵敵ヲ城内へ追入ル大須賀カ組紅
林助六郎吉治享年三十三歳ニノ晴十儿
討死ヲ遂ル

○紅林家傳ニ後年神君田中城ニ
渡御ノ時渠カ戦死ノ場所ニテ大須賀
カ隊ニ屬セシ驍士多キ中ニ紅林ハ人
ノ後ニ附サル壮勇ナリシカ不幸ニノ

早ク命ヲ爰ニ殞ス由嘆シ玉フト云々

○神君一戦ノ功ヲ高クシ深ク敵地ニ入
長ク屯スヘカラサル事ヲ慮リ玉ヒ旌旗
ヲ大久保五郎右衛門忠勝ニ命ニ兵ヲ
班サントシ玉フ所ニ忠勝尚敵城ヲ陷サ
ント怒リ退口ノ旌ノ押様ハ臣未タ學ヒ
スト旬儿同苗七郎右衛門忠世是ヲ憂テ
酒井忠次カ一備ハ人數ヲ纏ヒ上道ヲ退
ヘシ予伊良崎へ蒐リ御旗ヲ押サン早ク
御馬ヲ班シ玉フヘキ旨ヲ述テ引取所ニ

瀬戸辺ニテ敵近々ト進ミ来ル大給ノ松
 平左近大夫真乘大久保治右衛門忠佐内
 藤四郎左衛門正成寛助大夫正重佐橋甚
 兵衛吉久内藤甚五左衛門善教黒野五郎
 大夫都筑藤一後殿シ忠佐度々嚮ヲ返シ
 戦フ左近大夫白旄ヲ揮テ士卒ヲ下知シ
 敵ニ當ル甲州勢擬議ス井呂ノ渡口ニ於
 テ黒野火炮ヲ以テ敵ノ先登ヲ撃散ス時
 二佐橋吉久頻ニ矢ヲ發ス敵恐レテ進ム
 事ヲ得サル故吾兵危カラスノ瀬戸川へ

打入涉レハ敵モ赤川ヲ越テ慕ハントス
 忠佐黒野ニ告テ地ニ俯シケレハ則五郎
 大夫ハ忠佐カ體ヲ臺トシ筒ヲ載テ發セ
 ントセシ故敵川ヲ涉ラヌノ退キ歸ル
 神君黒野ヲ称美シ玉ヒ御持ノ鳥銃ヲ授
 ラル 神君榊原小平太康政本多平八郎
 忠勝ヲ以テ光明ノ砦ヲ攻ラル此地嶮路
 十餘町ニシテ無雙ノ要害也ト云ヘ凡味方
 二王堂門ニ至リ急ニ攻ル 神君横川ヲ
 御木陳トシテ夫ヨリ兵ヲ鏡山ニ登セ後

ヨリ城内ニ攻入玉ノ安藤彦兵衛直次教
 令ヲ諸軍ニ達シ且冑首ニ級ヲ得夕小城
 將朝比奈又太郎援兵天野宮内右衛門力
 從者遂ニ降テ壘ヲ渡シ甲陽ニ走ル大久
 保忠世カ兵ヲ以テ此砦ニ籠ル
 ○是月蜷原ノ砦ニアル大久保忠世使節
 ヲ神君ニ馳テ二股城將依田下總守幸
 成病死シ其子右衛門幸致諸軍ヲ司ルト
 雖此喪ニ乘シ是ヲ攻ヘシト云々 神君
 兵ヲ二股ニ蒞シ大久保神原ヲ先鋒トシ

城ヲ攻玉ヲ信長ノ援兵且至ル于時野見
 ノ松平次郎右衛門重吉其齡七十八歳衆
 ニ先シ城下ニ迫ル諸人大ニ其勇烈ヲ感
 シケレハ重吉ハ同善四郎康安ニ語テ曰
 某年既ニ頃キ先ヲ争フヘカラスト云ハ
 尾州ノ平手某衆ニ先立故援兵ニ越ヘ
 ラレン事ヲ耻テ魁出スル由ヲ述ル此趣
 高聽ニ達シケレハ比類ナキ忠臣ト嘆美
 シ玉フ

○福釜家傳ニ曰三郎次郎親俊鳥羽山

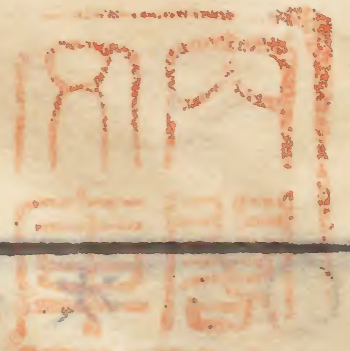
ノ若ニ於テ病ニ卧ス一神君其營ニ
渡御アリテ病ヲ訊ヒ且手自ラ湯藥ヲ
賜フ遂ニ所勞大漸ニ及ヒ故邑ニ歸ル
于時往昔長親君ヨリ福釜ノ祖右京
亮親盛ニ屬セラレシ天野源兵衛忠俊
カ子彦右衛門忠次ニ二百人ヲ添テ
ヲ守ラシムト云々

○酒井左衛門尉奥平九八郎ハ神君ノ
命ニテ岐阜ニ到ル信長厚ク接待セラレ
且二將カ驍勇ヲ感賞シテ曰長篠ノ全勝

ハ信昌カ武畧ヲ以テ猛敵ヲ防キシ堅固
ノ籠城ニ起リ且忠次カ鳶カ巢山夜蒐ノ
計策ニ因テ也ト稱嘆不斜シテ差料摺上
一文字ノ利刀此目貫筭ハ後藤光乘作也
並ニ紋付ノ暑衣唐織ノ胴服ヲ信昌ニ賜
ハリ法城寺ノ薙刀革袴韋羽織ヲ以テ忠
次ニ授ク

七月大

○十一日福釜ノ邑ニ於テ松平三郎次
郎親俊或ハ称亮卒ス法諱笑天野彦右衛門



忠次直ニ親俊カ子三郎次郎康親ニ屬ス
 ○福釜家傳ニ曰康親ト彦右衛門忠次
 甲州方伊藤左近カ輩ル遠州入坂ノ岩
 ヲ攻拔左近ヲハ康親忠次相討ニスト
 云々其年月ヲ傳ヘス

○同家傳ニ曰初親俊其子十キ故備頭
 ノ酒井忠次カ庶子甚三郎久恒ヲ嗣子
 トス後年親俊カ室奥平久兵衛貞男子
 ヲ生ス是今ノ康親十リ爰ニ於テ久恒
 實家ニ皈ル然レモ尚松平ト称シ其苗

胤繁多ニシテ酒井左金吾之家ニアリ

○廿日鳥居彦右衛門元忠在候トメ諏
 訪原ノ城邊ニ到ル敵元忠カ猩々緋ノ羽
 織ヲ見覺ヘ火炮ヲ發シ腰差ノ團扇ニ玉
 ニツ脇差ノ鞘ニ玉ニツ中ルトイヘ元
 忠敢テ驚ク容十ク進ミケルカ重テ左ノ
 股草摺ノ動ノ絲ヨリ打通サレ馬ヨリ落
 ル從士杉浦藤八郎是ヲ扶テ退去ル元忠
 痛手也ト雖遂ニ平愈ス然レモ跛ト成テ
 行歩心ニ任セス近藤平右衛門秀用小林

勝之助正次先登ノ城兵下戦ヒ首級ヲ獲
 ル大久保治右衛門忠佐首二級ヲ得タリ
 榊原力從士外山小作二代長谷川内記以
 下戦死ス其外康政力勢粉骨ヲ竭シ卯ノ
 刻ヨリ辰ノ刻迄巖シク攻ケレ氏城ヲ陷
 ス事ヲ得ス

○或曰戸田三郎右衛門忠次力嫡子三
 九郎存候ニ出テ諏訪原城中ヨリノ火
 炮ニ中テ死ス神君忠次ニ向テ汝カ
 子タル故存候タラシム不幸ニノ死歿

入恨ル事勿レト宣フ

○奥平傳記ニ曰織田信忠岩村ノ城攻
 ヲリ佐久間右衛門信盛ヲ遣ハシ甲州
 方ノ持分參州設樂郡竹節ノ城ヲ攻撃
 シム神君ヨリ援兵トメ奥平九八郎
 信昌来テ一隊ヲ以テ彼城ヲ攻拔ケレ
 ハ神君彌御感有テ武節城並ニ采邑
 ヲ信昌ニ賜フ或ハ彼武節
 ヲ伏地ニ云
 ○松平真乗家傳ニ曰武田勢信州ヲ跋
 スルノ聞工アリ神君御書ヲ真乗ニ

賜ハリ參州信州ノ境竹節ノ城ヲ守ル
ヘキ旨命アリト云テ按入ルニ真乘
與平信昌カ兵ニ代テ竹節城ヲ守ルカ
又ハ援兵タル歟

○或曰諏訪原寄手ノ内ヨリ刈田奉行
ノ族毎日輕兵七八百人引率シ小山ノ
城外ニ赴ク或時駿州岡部鞠子田中江
尻ノ敵謀ニ合セ二千許出張ノ味方難
儀ニ及フ處諏訪原ノ寄手是ヲ聞テ一
騎駈ニ多勢須臾ノ間ニ馳著 神君モ

御出馬アリ敵河原ヲ越テ大井川ノ中
洲ニ退キ擬議シテ屯ス味方モ事不意
ニ起テ部伍整ハサル故遂ニ諏訪原ノ
附城へ兵ヲ收ムト云々

八月小

○十四日 信長四万餘ノ大軍ヲ率シテ
越前敦賀ノ津ニ著陳アリ是ハ去年彼國
一向宗門ノ徒蜂起シ大坂ノ本願寺ヨリ
遙々軍監ヲ差越國中動亂スル故征伐ノ
為十リ若州ヨリ粟屋越中守勝久同弥四

郎逸見駿河守昌經内藤疏前守熊谷傳左
衛門山縣下野守白井民部丞寺井源左衛
門松宮玄蕃允同左馬允香川右衛門大夫
畑田修理進丹後ヨリ一色左京大夫義定
力兵船越前ノ北浦へ著岸ス諸方ノ寄手
十萬八千人ト云々不日ニ一揆方ノ虎杖
木ノ目峠鷹打カ岳鉾伏府中龍門寺中ノ
河内河野杉津ノ敵城ヲ或ハ屠リ或ハ降
入其餘今庄以下諸砦皆落去シ斬獲セラ
ル々緇素數ヲ知ラス

○十八日 味方本多忠勝等諏訪原城ヲ
覓ニ攻テ忠勝カ臣中根九郎左衛門以下
戰死ス酒井雅樂助正親勇ヲ勵ム 神宮
是ヲ賞シ白旗ヲ賜ハリ永ク家寶トス抑
諏訪原ハ嚮ニ馬場美濃氏勝カ矩繩ヲ以
テ旧壘ヲ改メ築キ最モ名城也ト雖三旬
カ内ニ味方築山井樓ヲ設ケ緊ク攻ル故
敵大ニ困究ス
○越前一揆平均セシカハ信長彼國ヲ一
圓柴田修理亮ニ賜ハル但シ府中十萬石

ヲ前田利家不破彦三佐々内藏助ニ授ク
 大野郡ヲ原彦次郎金森五郎八ニ與ヘ柴
 田ニ屬セラルル丹波ノ國桑田船井二郡ヲ
 細川兵部大輔藤孝ニ賜ハリ丹後ノ國ヲ
 一色左京大夫義定安堵スヘシト云々
 ○廿四日 諏訪原ノ城兵諸賀小泉海野
 遠山等終ニ拒キ守ル事ヲ得ス今夜密ニ
 是ヲ避テ小山城ニ走ル 神君諸將ニ向
 テ 曰諏訪原ハ敵城高天神ヘ往反ノ要
 路且駿州田中持船ノ敵ト大堰ノ一河ヲ

隔ツ田中ノ敵屢々来リ闘フヘシ勝頼モ
 亦間隙ヲ窺ヒ来リ攻ヘシ誰カ我為ニ諏
 訪原ヲ守ラシヤ松井左近忠次進テ曰臣
 不肖ナリト雖此壘ヲ守ラシ 神君御感
 ノ餘リ松平氏並ニ 御諱ノ一字ヲ賜ハ
 リ其名ヲ周防ト改ラレ爰ニ於テ松平周
 防康親ト稱ス 後年從五位下周防守ニ任叙スルハ此子康重也 抑
 勝頼カ暴虐殷紂ニ似タリ周ヲ以テ防キ
 敵ヲ牧野ニ敗ルヘシトテ諏訪原ヲ牧野
 ト改メ遠州ノ樽木川尻七百貫ノ地ヲ以

テ康親ニ加恩セラル舊領庄ニ四千七百
 貫十リ且小笠原丹波安次小笠原安藝信
 元ヲモ副テ彼城ヲ守ラシメ又御一族御
 譜第ノ内一將宛交替ノ加番スヘキ旨
 命アリテ牧野若馬允加ハリ守ル予時康
 親誓テ曰駿州ヲ伐取徳川家ノ御分國
 ト十サスノ我歿セハ遺體ヲ駿陽ノ地ニ
 葬ルヘシ骨骸ノ後ト云々臣必彼國ヲノ
 君ノ掌ニ入ント云々聽者其忠烈ヲ感ス
 果シテ是ヨリ七年ヲ歷テ駿陽ノ神君ノ

掌握ニ入其間勝頼出張シテ是ヲ責ル事
 數回十リ且田中ノ城兵太堰ノ一水ヲ越
 テ足輕軍空シキ日ナシ康親時々河ヲ涉
 リ麥ヲ薙田ヲ蹂テ闘フ事其數ヲ知ラス
 且藪田遠目ノ敵出テ戦フトイヘ庄一度
 毛利ヲ得サル事ナシ勝頼長篠大敗ノ後
 北條家ヲ推賞フ事等閑ナラス偏ニ彼
 麾下ニ似タリ剽ヘ勝頼頻ニ使節ヲ馳テ
 氏政ノ妹ヲ以テ妻タラント乞フ因茲小
 田原ノ老臣會合ノ評議ヲ凝シ此事然ル

へシトテ許諾セシム夫ヨリ以后勝頼五
節句ノ佳儀トシ小田原へ名代ノ使節ヲ
發ス衆大ニ勝頼ヲ誹リ又辻條家ノ弓矢
義ヲ闕テ剩一愚將ヲ姻家トシ殃ヲ招
トスル事ヲ嘲ル

○廿八日 神君光明諏訪原ノ西城ヲ拔
テ小山ノ城ヲ攻ニ事ヲ議セラル酒井忠
次諫テ曰吾既ニ西城ヲ得タリ敵城機ヲ
失ヒ魄ヲ褫テ次第ニ降附スヘシ今吾軍
ヲ外ニ曝ス事日久シ衆力或ハ瘦レニ兵

ヲ収メ暫ク他日ヲ待テ可ナラニ且勝頼
ハ無謀血氣ノ將也今急ニ小山城ヲ攻ハ
必来リ救フヘシ是全勝ノ道ニ非ス松平
周防康親曰長篠ノ大捷ニ武田ノ敢士鏖
ニス今小山城ヲ攻ルハ勝頼救フ事アタ
ハシ小山城ヲ拔ハ高天神ノ城兵攻ルヲ
待タスノ逸云ニ 神君此詞ヲ可也トメ
小山ヲ攻玉フ則康親ト石川伯耆守先鋒
タリ松平善四郎康安先登ス本多忠勝力
部下中村與惣内山忠三郎小野田與一郎

城兵卜鎗ヲ合入日置三藏鎗脇ヲ射ル小
 泉弥八郎杉下七兵衛出屋甚助戦死ス是
二代松平又八郎家忠進之闕テ首級ヲ獲
目也夕リ松平康親本多忠勝能下知ヲ加へ從
 軍各功ヲ顯ハシ康親自身敵餘多討捕城
 ヲ遠ク圍ム
 ○越前一向宗ノ徒當十五日以來或ハ生
 捕或ハ搜シ求メ斬獲セラル處ノ僧侶七
 百郷民一万二千二百五十餘人ニ及リ一
 乘谷へ信長本陳ヲ遷シ柴田羽柴惟任光

秀戸次右近政次細川藤孝稻葉一鏡ヲ以
 テ細呂木ヨリ賀州へ働セラル處ニ不日
 ニシテ能美江沼二郡雌服シケレハ檜屋
 大聖寺兩城ヲ修築シ戸次右近ヲ將トシ
 佐々權左衛門政祐島弥左衛門且回忠セ
 シ堀江中務景忠溝江大炊助ヲ籠置テ兵
 ヲ班スヘキ旨下知セラル于時奥郡ノ一
 揆附慕ヲ羽柴秀吉返シ闕テ首二百五六
 十級ヲ擊捕ト云々

九月大

○二日 信長越前豊原寺ヨリ軍ヲ北庄ニ凱サル刻頃年此豊原寺ノ僧等他宗ノ下間筑後法橋杉浦壹岐法橋七里參河等ヲ引入敵對ノ罪宥メ難シトテ一山悉ク燒拂ハル当月下旬信長

○十五日 先達テ勝頼小山ノ城ノ後援ヲ欲スト雖長篠大敗ノ後ハ其兵寡ニ是ニ依テ戦死スル所ノ将卒等力親族ヲ訪求メ或ハ僧徒巫醫ノ類迄ヲ俗ニ還シ其家號ヲ冒シ衆心ヲ鎮撫シテ漸ク騎歩ニ

万非募リ申陽ヲ獲シ駿州ニ出ルト云々

○十七日 勝頼遠州ニ發スル告アリシカハ 神君前ニ堅城アリ後ニ大敵ヲ受ル危ヲ避ル事良将ノ所為也トテ軍ヲ歸スヘキ其路次ヲ尋ラル内藤三左衛門信成曰直ニ山ヲ越テ退クヘシ酒井忠次及ヒ富永孫大夫白山ニ宿テ退クハ敵ヲ畏ルニ似テ却テ殆シ川ニ傍テ敵ニ向フ如クノ退キ玉ヘト 神君是ニ從ヒ軍列ヲ定メラル石川數正松平玄蕃頭清宗同與

一郎忠正同又八郎家忠同左近大夫真乘
 鈴木越中守重愛同喜三郎重時酒井與七
 郎忠利西郷孫九郎清員先駟也信康君是
 二繼之玉ノ榊原康政本多忠勝石川長門
 守康通本多廣孝大須賀康高兼田七九郎
 康忠久野三郎左衛門宗能三宅惣右衛門
 康貞其次也水野惣兵衛忠重鳥居彦右衛
 門元忠大久保忠世本多作左衛門重次同
 百助信俊是ヲ信春ニ菅沼藤藏定政植村
 出羽守家政同庄右衛門忠安正勝ニ作ハ

ハ忠安カ子也御旗本ヲ圍繞又後軍ハ酒井忠次
 松平甚太郎家忠松平周防康親松平源七
 郎康忠本多彦八郎忠俊菅沼新八郎定盈
 牧野右馬允康成卜定メウレ東參河ノ兵
 是ニ屬ス果シテ小山ノ城兵味方ノ跡ヲ
 躡テ来ル東條ノ松平甚太郎同周防酒井
 左衛門尉後殿シテ擊退ク
 ○勝頼力魁五六千岡部藤枝迄押来ル
 神君ハ川ニ添テ敵ニ向カスノ井呂崎
 ノ岡迄引取玉ヒ爰ニテ敵川向ニ至ルヲ

見玉ヒ信康君ニ向テ 曰既ニ今迄ハ敵
 ニ向フ如クメ引取ト雖是ヨリハ敵後ニ
 アリ汝弱年ニメ軍旅ニ長セズ早ク退ク
 ヘシト信康君ノ曰 賢命ノ如ク北ニ往
 ハ敵後ニアリ 家君豫シメ退カセ玉フ
 ヘシ信康後殿タラン由請ヒ玉フト雖
 神君許シ玉ハス信康君ハ 家君ヲ跡ニ
 シ子トメ何ソ先ニ引取ニヤト頻ニ辭シ
 玉フ所酒井忠次来リケルカ是非ヲ論セ
 ス忠次ハ先ニ退クヘシト謂テ無ク卒ヒ

去ル故ニ神君モ退カセ玉フ其時信康君
 徐々ト鹽合ヲ見量リテ退クヘキ旨命ア
 リ備ヲ正メ後拒シ玉フ折シモ細雨降テ
 黄昏ニ及ヘハ味方ノ諸備躁キ出ル榊原
 康政如斯葛ハ諸手退次第ト下知スヘキ
 旨牧野半右衛門正勝ヲメ御旗本ヘ達シ
 即軍使ヲ馳テ諸隊ヘ令ヲ施シ次第ヲ守
 ラスノ悉ク引取セテハ却テ諸軍ノ動
 搖自然ニ鎮マリ須臾ノ間ニ軍ヲ退クト
 去々ニ神君上ノ臺ニ騰リ玉ヒテ御後ヲ

御覽信康君ノ退口ヲ稱美シ玉ヒ天晴勇
 將我勝頼十萬ノ兵ヲ以テモ是ヲ挫ク事
 アタハサラント宣ヒテ牧野ノ城ニ入
 玉フ既ニ武田ノ先隊百騎許魁出ノ井呂
 川ノ岸ニ臨メリ味方後殿十二騎ノ中ニ
 モ大久保治右衛門忠佐小林勝之助正次
 中根善次郎池水之助向ノ川端ニ蹈止ル
 是ニ依テ高力權左衛門正長ニ日下
 部五郎八重好以下駒ヲ班シ來ルヲ見テ
 夜陰故多勢ト思ヒタルニヤ敵川ヲ渉ス

事ナシ此後殿絶類ノ銳勇タル由世々稱
 不斯テ武田ノ諸軍追々ニ川邊ニ至リケ
 レ臣新夕ニ募リ求ムル弱兵ニ神君ヲ恐
 テ川ヲ渉スノ志ナク忙然トノ屯ス勝頼
 怒テ勵テシ進メントセシ所ニ高坂彈正
 強テ是ヲ止ム
 ○十八日 勝頼鑣束原ニ至ル 神君ノ
 勢柵中ニ屯シ斥候谷ノ向ニ至ル晚ニ及
 テ勝頼小山ノ城中ニ入リ籠城ノ勞ヲ擣
 ヒ駿州ノ先方蒲原小兵庫鳥居甚大夫朝

倉六兵衛在重朝比奈金兵衛村松藤左衛門望月七郎左衛門岡部忠次郎鈴木弥次右衛門ニ感状ヲ授ク
 神君進テ横須賀ニ至テ張陳セラル勝頼ハ小山ノ城ヲ修補シ糧ヲ高天神ノ城ニ籠テ軍ヲ歸メ神君モ牧野ノ城ヲ修理セラレテ濱松へ還入シ玉フ

○廿一日 大坂本願寺ヨリ平井矢木金井三人ヲ以テ和睦ノ謝禮トシテ上京アラシメ小玉檻枯木花ノ名畫三幅ト三輪

肩衝ヲ信長ニ獻ス三好山城守康長入道笑岩モ再ヒ降参シテ三日月ト云名物ノ葉茶壺ヲ獻ス于時信長ハ洛陽妙覺寺ニ寓居ト云ク

○廿三日 飛驒國主姊小路中納言頼經卿上洛ノ信長へ謁見ス

○廿八日 信長京堺ノ茶道者ヲ呼テ予宗易利休ヲノ茶ヲ點セシメ是ヲ賜フ茶亭ノ床ニ遠寺晚鐘ノ掛物牧溪筆東山三義政公所持日月ノ葉茶壺違棚ニハ茶臺白天目内赤

卷之十一
四十一
畫中
四十一

ノ盆ツク毛髪ト云茶入其下ニ香合アリ
松島ノ壺且乙御前ノ釜ヲ飾ラルト云々

十一月小

○四日 信長權大納言ニ任セラル

○七日 信長右近衛大將ヲ兼任シ玉ヲ

○十日 美濃岩村ノ敵城ハ城介信忠

篠ヨリ直ニ出張シ攻討玉フ事嚴シク武

田勝頼後援トシテ信州伊奈郡迄出陳ス

ト雖其勢微ニ大雪ニ託シ空シク彼處

ニ踰躑シケレハ城兵力盡テ切抜レト欲

シ今夜態ト水精山ニ屯スル河尻與兵衛

鎮吉毛利河内守秀頼淺野左近猿菽甚六

郎力隊へ夜討シ其競ニテ遁去ントセシ

力柵丈夫ニ夜守ノ備嚴整ニ破リ難キ

所ニ信忠是ヲ見切テ自ラ手ヲ碎テ其

去ントスル敵ヲ再ヒ城内ニ追入ラル水

精山ニ向ヒシ敵モ狼狽シ山林ニ遁隠ル

所ヲ悉ク探シ求メ侍大將物頭等廿一人

雜兵二千百餘人ヲ斬獲アリ

○廿一日 岩村ノ城將秋山伯耆晴近

卷之十一
四十一
畫中
四十一

鳥座光寺尋塚本小六膳ニ便ハ隆
 信忠是ヲ諾シ今日小大膳ハ塙傳三ハラ
 以テ秋山並ニ大島木工助座光寺勤左衛
 門氏定ヲ城ヨリ出シ岐阜ニ送リ其餘遠
 山ノ七家トテ加藤次景廉力後胤ニテ武
 名アル市之丞次郎三郎三右衛門四ハニ
 郎徳林斎内膳藤藏等ハ市之丞曲輪ニ追
 込テ信忠頻ニ攻ラル城中ヨリ突出ル事
 數回散々ニ相戦テ七人遂ニ生害ス勝頼
 此告ヲ聞テ早速伊奈ヨリ甲府ニ飯ル去

又ル元龜三壬申臘月信長ノ伯母壻岩村
 ノ城主遠山内匠助其嗣子十少ノ信長ノ
 八男御坊丸ヲ養嗣トス然ルニ翌癸酉三
 月秋山伯耆數月岩村ヲ攻襲テ所内匠助
 病死ス秋山即遠山ノ七家ト和融ノ言
 ノ援兵三十五騎ヲ殺害シ城ヲ受取ハ匠
 助後室ヲ己カ妻トシ御坊丸ヲ質ニ准シ
 甲陽ノ信玄ニ送リ其身岩村ヲ居城トス
 因茲信長ハ秋山六婦ヲ憎ムル々事案ノ
 今度伯耆ト大島座光寺ヲ捕ハ是ヲ

且伯母力岐阜ノ城ニ来ルヲ手
シル聞者其暴惡ヲ知ラスト云事十三
○廿三日 信忠岐阜ニ歸城信長ハ今度
信忠ノ勲功ヲ感シ来春岐阜ノ城並ニ濃
州ノ國士重器金銀咸ク與奪セラハ
蒲生郡安山ニ新城ヲ築キ近江ノ底
ヲ昵近ノ士ト定メ彼新城ニ移サレハキ
由沙汰アリ佐久間右衛門尉信盛信長ニ
讒訴シテ曰刈屋ノ城主水野下野守信元
志ヲ勝頼ニ通シ岩村ノ城中ハ糧米ヲ贈

ルト云々信長使ヲ遣ハシ信元ニ其事ヲ
譴問ハル實ハ岩村城中兵糧盡テ商賈ニ
依テ貨財ト米穀ヲ交易ス信元其出ル所
ヲ知ラスノ貨財ヲ收メ米穀ヲ遣ハル者
ナリ是ニ因テ其叛心ニ非ル事ヲ申及
為ニ信長ノ使ニ信元力從者ヲ添テ岐阜
ニ遣ハス然ルニ途中ニ於テ二使酒ヲ飲
テ沈酔シ相共ニ殺死スル故弥信元罪
陷ル信元ハ 神君ニ據テ片披シト
岡崎迄来ル信長ハ一人ヲ濱松ニ遣

卷之十五
日十一
信元

渠罪科究てレリ一生害ヲ命七シ
キ旨 神君ニ違ヒル 神君信二
テ大樹寺ニ置玉フ

十二月大

○廿三日 二股ノ城將依田右衛門兼致
義ヲ守テ籠城ストイヘ一任後援ノ憑
故寄手大久保忠世ニ倚テ和ヲ調ヘ城ヲ
避渡シ當坐ノ質トノ其弟善九郎後修理
國是源八郎後右衛門佐兩人ヲ 神君ニ
ナリ源八郎康勝是ナリ 神君ニ
獻スル所是ヨリモ質人ヲ奔致ニ與ヘラ

レ二股川ニ到テ互ニ其質ヲ戻シ依田ハ
高天神ニ赴キ甲陽ニ皈ル于時二股ヲ大
久保七郎右衛門忠世ニ賜ヒ其一族安部
四郎兵衛忠政大久保権右衛門忠為ヲ携
ヘ行コレ 鈞命ニ因テ也然ルニ忠
有テ二股ニ在留スル事ヲ辞シケレ任
神君御許容ナシ忠政憤ヲ含テ其長男四
郎五郎忠宣ト任ニ勢州ニ落鬼ス而レ任
慶長ノ頃 台徳公其武名ノ惜ミ忠誠ヲ
竭セシ事ヲ憐シ一 忠政カ老後ニ是一

歸サレ四郎五郎忠宣ハ勢州ニテ又傷
死歿ス當時參陽ノ内要樞ノ城々ハ吉田
ニ酒井左衛門尉吉良ニ石川伯耆守今度
ニ股ニ大久保七郎右衛門且遠州懸川ニ
石川日向守横須賀ニ大須賀五郎左衛門
以上五箇城ハ兩國ノ要地ト云ヒ跡ヲ
士ヲ副ラレ有勢ノ部將十リ此外遠參ニ
於テ城郭繁多十リ
○廿七日 信長ハ佐久間カ讒ニ因テ弥
怒甚シク 神君ヘ水野下野守ヲ殺サレ

ン事ヲ頻ニ密達アリシカハ為ン方十ク
久松佐渡守俊勝ヲメ信元ヲ迎ヘラル
神君信元カ岡崎ニ到ル頃松應寺ニ待請
テ害スヘキ旨平岩七之助親吉ニ命セ
ラル所石川伯耆守數正先往テ殺ス其跡
ヘ七之助至レリ久松俊勝ハ信元ニ死ヲ
賜フ事ヲ知ラスメ迎ヘル故 神君ヲ恨
テ暫ク出仕ヲ止ム信長ハ信元カ舊領刈
屋ヲ以テ讒臣佐久間ニ忌補スル處信盛
邪慝深クメ刈屋ノ合屬水野太郎作清久

ヲ始メ悉ク追失テ稅租ヲ倉廩ニ收斂人
 ○是年遠州周知郡小國社ハ當國一人宮
 十リ 神君ヨリ造營ヲ遂ラル天下混一
 ノ後神田五百九十石ヲ寄附セラル大須
 賀康高力部下坂部又十郎正家力次男三
 十郎廣勝後改三郎兵衛今年十五歳ニノ禱ヲ賜
 ハ川大須賀ニ屬セラル參州碧海郡登賀
 利村ノ住士深津四郎兵衛正利力ニ男一
 郎兵衛七年十四歳ニノ御小姓ト成參州
 渥美郡田原ニ於テ内田近江正之卒ス
氏本

ハ勝間田ナリ野呂猪之丞正景御家人ニ列入渠
 ハ勢州安濃郡棕木ノ城主也敵徒ニ采邑
 ヲ侵畧セラレ遂ニ没落シテ濱松ニ來ル
 處トリ

○安部家傳ニ曰大藏光真ヲ 神君ヨ
 リ遠駿ノ境ニ若ク設ケテ籠置レシカ
 甲州方ノ八講山ノ麓ヲ拔テ是ニ移ル
 トアリ今年ノ事十ルカ
 ○大久保忠教力參河記等ニ曰 神君
 長篠ノ援兵ヲ謝シ至ハン為ニ岐阜ニ

長篠ノ援兵ヲ謝シ至ハン為ニ岐阜ニ

赴キ玉ヒシカハ信長厚ク遇セラル扈
從ノ諸士ニ賜物アリ于時彼鬚男來ル
ヤト問玉フ江原孫三郎出ケレハ汝ニ
ハ非ス長篠ノ勝利ヲ十人鬚男ノ事也
ト其時大久保治右衛門出テ兄也世ハ
來ラス臣一人扈從セシムト答フ信長
ハ汝等兄弟拔羣ノ功アリシトテ手自
衣服ヲ授ケ神君ニ向テ勝頼今ヨリ
夕參遠ノ間ニ出軍難カルヘシ早ク
徳川殿駿州ヲ伐取玉ヘ何時モ援兵ヲ

遣ハスヘキ旨宣フ 神君是ヲ謝ノ濱
松ニ歸リ玉フト云々惜哉月日詳ナラ
ス是ニ仍テ爰ニ記シ畢又
○信長ヨリ佐々權左衛門政祐赤座宮
内左衛門ヲ越後ニ遣ハシ謙信へ幣物
ヲ贈リ且嚮ニ春日山ニ附置ル此田右
馬助稻葉彌助ト交替ノ彼地ニ在雷シ
謙信ノ安否ヲ伺ハセ上方筋ノ用途ヲ
聞テ是ヲ辨セシム是信長務テ英雄ノ
心ヲ擊ル謀畧ナリ

○神君長篠軍功ノ輩其僉議ヲ審ニノ
抽賞ヲ施サル彼俊ニ本多甚九郎正近
戦死ス其子ナキ故從弟高木彦左衛門
清政ヲメ家督ヲ繼セラニ清政ハ高木

甚太郎清方力實子ナリ出立

